

(城西人文研究第26卷)

〔研究ノート〕

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解 (八)

黄色 瑞華

凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二二、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』の所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に()に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊸として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も最小限とした。

一 注釈史上看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

俳諧 一茶発句集 下

秋の部 (承前)

草花を腮でなぶるや勝角力

㊸ 株番・文政版発句集

▽ 七番日記(文化9・7)、「勝角力や腮にてなぶる草の花」。

解 草花を一本手にした勝力士、その得意げなさま。

板行にして売けり負角力

㊦ 八番日記(文政4・9)、「売れけり」。だん袋・文政版発句集

▽ 梅塵本八番日記(文政4)、「負相撲板行にして売れけり」。

注 「板行」、一枚ずりの錦絵。

解 相撲は強くないが、美男の人気力士。

縁はなや二文花火も夜の体

㊦ 文政版発句集初出。

▽ 七番日記(文化14・8)、上五「よい雨や」。全集本、座五「夜の鉢」と誤る。

解 縁先で灯す線香花火。それはたちまち終わってしまうが、それも静か夜の一興というところだ、の意。

稲妻やうっかりひよんとした顔へ

㊦ 七番日記(文化11・8)・希杖本句集・文政版発句集

▽ 八番日記(文政2・7)、「稲妻につむりなでけり引臺」。おらが春、「電(に)天窓なでけり引がへる」。

注 「うっかりひよんとした顔」の主体はヒキガエルであろう。

解 鈍重なヒキガエルの動きと稲妻を対照した。俗語の使用でその「をかしみ」を一層鮮明にしている。

▼ 穎原『名作集』に、「ぼんやり空でも眺めて居る所へ、突然ピカリと稲妻が光つたので吃驚したといふのである。句の内容は何でもないことであるが、『うっかりひよん』といふ俗語を用ひたのが一茶の独壇場といふべきで、それでおどろいた様子が躍如として来る」。

たのもしやまだ薄暑き三日の月

㊦ 嘉永版発句集初出・発句鈔追加

▽ 稿本発句題叢、中七以下「暑さのとれぬ三ヶの月」。
希杖本句集、中七「暑さのとれぬ」。

解 木枯が来るのには、まだ間がありそうだ。月が出るころになっても、昼の暑さが残っている。老の身にはそれがたのもしい、の意。

門の月暑あつさがへれば人もへる

㊤ 嘉永版発句集初出。

▽ 八番日記（文政4・7）、中七以下「暑あつさがれば友もへる」。

解 夏の暑いさかりには、月の出るころになって訪れる人も少なくなかった。昼の暑さが減って夜の来訪者も少なくなった、の意。

神 前

秋風や草も角力とる男山

㊤ 文政版発句集初出。

解 さすが「男山」、草までが相撲を取っているぞ、

の意。

高井野の高みに上りて

秋風や磁石まがしにあてる古郷山

㊤ 八番日記（文政2・9）、前書「旅」・おらが春・文政版発句集

注 一茶は文政二年九月二十五日、高井郡紫に久保田春耕をたずねている。

解 秋風の吹く「高井野の高みに上って」、柏原の方向に向けて磁石をあててみた、の意。だれにもらったのだろうか。手もとの磁石に対する好奇心がこの一句を生んだ。

▼ 川島『新釈』に、「遠い旅にあつて遙に故郷の山に向つて磁石をふるといふやうな感傷的な場面ではないが、僅か数里の行き馴れた道にも、ふと故郷の山を見返つて物懐しく、磁石を取出して見るといふ軽い動作の中に、いかにも秋風に衣を吹かれる旅人らしい寂しい優しい気持ちの出で居ることが、この

句の捨て難い味ひである。「勝峯『名句評釈』に、「物珍しさの好奇心から、彼はその平野から故郷柏原方面、黒姫山、妙高山の聳え立つ方向にあて、見て、成程とうなづいてゐる」。勝峯『評釈』に、「遠望の利く高みに佇つと、そゞろ郷愁の起るまゝ、この隙に秋の沁みる思ひがする。一茶の目標に起伏する遠山の中の伊勢見山である。柏原をその根に擁する故郷の山で、その名の聞える一峰である。その方角に磁石をあて、見たら、ひょっと強い引力でこっちへ寄って来ないでもない。風土記の国来々々を想ふ。それ程なつかしい故郷山である。山かげの柏原なのである」。川島『新解』に、「これは郷愁というには余りに淡い数日の旅愁であるが、淡い旅愁であるゆえに、一層、明るい寂しさが湛えられている」。荻原『新解』に、「故郷の柏原はどちらになるであろうかと眺め、磁石を取り出して方向を見定めたというのである。『秋風や』ということばに、その季節にふく風の方位という感じも出ている」「故郷の山ということばを『故郷山』というのは無理な言葉遣

であって、ここを五文字にするために、強いて作った用語として、感心しかねる気がする」。中島『一茶集』に、「高井野の小高い岡にのぼり、秋風に吹かれながら、故郷の山山を眺め、磁石をとり出して方向を見定めた」。丸山『一茶』に、「足をとめて柏原の方を見返ると、黒姫・妙高などの山々がなつかしく望まれる。一茶は磁石を取り出し、その方向に針を当てて、しげしげと見入っているのである」「近村行脚中の一情景に過ぎないが、その途上で故郷の山を見かけて、ふとなつかしく、磁石を取り出して見るといさりげない動作の中にも、淡い旅情のようなものが感じられる」。

病 後

かな釘のやうな手足を秋の風

㊦ 志多良・句稿消息一茶翁終焉記・文政版発句集

▽ 志多良、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして」の小文に付す。句稿消息、上五「鉄釘の」、希杖本

句集、座五「秋の暮」。

注 一茶は文化十年六月十八日より善光寺の桂好亭（上原文路宅）で悪性の腫物に病み、七十五日間病臥した。この句を収める小文には、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして、九月五日といふに、筈にすがりて、霜がれの虫の這ふやうに、二足三脚歩きては一息つき、四足七脚運びては臍をさすり」とある。

解 大患後の衰弱しきった体を北信の冷たい秋風に吹きなぶらせながら、門人間を巡回する自身の姿を詠んだ。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「癰で七十五日も臥床してゐたのだから瘦せ細った事は想像に余りある。かな釘の様になつた手足に秋風寒く踏々跟々として歩く様は目に見える。『かな釘のやうな』といふ形容は例の一茶流の俗語で、しかも印象極めて強い措辞といはなくてはならぬ」。栗山『一茶』に、「『かな釘のやうな』という形容はいかにも一茶らしく、病後の衰弱しきった体を風に吹きなぶらせながら踏跟

と足を運ぶ彼の姿が描かれている。」丸山『一茶』に、「大患後、衰弱しきった病軀を秋風に吹きなぶられながら踏跟と足を運ぶ一茶の姿が目に見えるようだ」。

秋風に歩いて逃るほたる哉

㊤ 七番日記（文化10・8）・志多良・八番日記（文政2・7）・おらが春

解 冷たい北信濃の秋風に、飛ぶ力を失なった螢に、手をのばせば歩くように逃げて行く、の意。衰残の螢の姿に作者の境涯の投影を見る。桂好亭に病臥中の作。

▼ 川島『新釈』に、「夏の夜の景物である螢を、昼間、然も秋風の中に見出して居ることが既に珍しく、傷しい感じを伴ふ。首筋の赤い黒い小さな虫が、何物かに追はれるやうに、それも飛ぶ性質を持つ螢が早足に歩いて逃げて行く姿は、いかにも秋風のすさまじさを思はせる」。暉峻『名句の鑑賞』に、「夏も過ぎて衰へた螢が、秋風の吹く明るい真昼、追はれ

るやうに草葉の蔭を這うてゐる様は、哀にいたましい姿であります。普通夏の物として詠まれる螢を、秋風の中に見出した著想も珍らしく、又『歩いて逃る』といふ中七以下の写生も動かす可からざるものであります。栗山『名句評釈』に、「螢は夏の夜の景物である。秋風が吹く頃ともなると、すっかり衰えた螢は飛ぶ力もなく、迷いこんだ縁先などをよたよたと逃げるように歩いている。おそらく昼間の景であろう」。加藤『秀句』に、「秋風が立つと、吹かれた螢は、飛ぶ力もなくなつて、歩いて逃げるのを見てとつた作。『秋風に』は秋風に追いたてられて、ととると月並な感じになる。これは『たちそめた秋風の中に』の意味であろう。螢は元来飛ぶものだけに、『歩いて逃げる』があわれにひびく。一茶の目は、この本来ならぬ姿に、かえってきらりと光ってくるのである。この句のもたらす笑いは、完全に純化されてはいない。しかし大口あけて哄笑してしまえないようなほのぼのとしたものである」。丸山『一茶』に、「首筋の赤い小さな螢が、風に追われる

ように逃げて行く姿は、あわれである。『歩いて逃る』に、気力も衰えた螢の生態が活写されている。しかも、この時身動きもできぬ病床に臥していた一茶の境涯を念頭に置いて、この句に対すると、一層哀愁の感が深く、秋風も一種凄愴の色を帯びてくる。もはや、秋の螢への哀憐を詠んだだけの句ではない。この衰残の螢には、おのずから作者の境涯が投影しているのである。

さと女三十五日

秋風やむしり残りの赤い花

㊦ 文政版発句集初出

▽ おらが春、前書「さと女世五日墓」。中七「むしりたがりし」。

注 前年五月四日に生まれた長女さとは、文政二年六月二十一日痘瘡のために夭折した。おらが春第十四話にその死を悼む切々たる情を込めた一文を成し、「露の世は露の世ながらさりながら」の句で結んで

いる。右の句は、その三十五日の暮参での感慨。
 秋風の中に遅咲きの小さな赤い花がゆれている。
 解 この残り花も愛娘が残した思い出のひとつなのだ、
 の意。

▼川島『新釈』に、「この句の中七は発句集に『むしり残りの』となつて居る。後に訂正したものと思はれる。なるほど、むしり残りの方が景はハッキリして来るが、私はやはり原句の方により多く真情が籠つて居ると思ふ。折柄さらくと秋風の吹く頃で、墓のあたりには真紅な曼珠沙華が何か咲いて居る。死んだ子がよく目をつけてむしりたがった花で、その度毒草の故を以て小言を言つたことなどを想起したと想像して見ると、一層堪ら「れ」ない作者の啜泣を聞くやうな気がする」。吉田『講座』に、「初秋のころの赤い花である。幼児は亡くなつたが、ただむしりかけの花はそのまゝに初秋の日を浴びてゐる」。黒沢『研究』に、可憐な句です。幼児と赤い花——の印象だけでもその切情を知ることが出来ます」。勝峯『名句評釈』に、「『秋風やむしりたがりし赤い

花』見る物聞く物が皆悲しい思ひ出の種である。『秋風』は只季節を示すだけの為に置かれたのではない。赤い花が、その秋風に吹かれ揺られてゐるのが、何か無しはかなく死んだ我が子の運命、我が子の姿の様に思はれもする」『むしり残り』なら、一部をむしつた事が有るを示し、『むしりたがり』では、むしつたとも、むしらずに終つたとも取れる。この二語の可否については容易に断言しかねるが、『むしりたがりし』の方が動作がより多く出てゐるといふ点に於て勝るであらう。暉峻『名句の鑑賞』に、「さらでだに物悲しい秋の風吹くこの頃、物皆思ひ出の種とならざるものはない。その中で特に、生前さと女がむしりたがった赤い花が、さと女はかない運命を象徴するものの如く、秋の風にゆれ動いてゐる。赤い花とは恐らく、秋の野に咲く深紅の曼珠沙華なのでありませう。けれども幼児の欲望をそそのめるのは、只にその赤い色をもつてなのです」。勝峯『評釈』に、「あのさと女が花さへ見れば欲しがつて、せびるので、折つてやると、もてあそんで

るのも東の間、すぐ捲つて了つて、きやら／＼笑つたつけよ、なあ。今は草葉のかげに埋まつていくらこんな赤い花があつても、あんなに捲つては喜んだ顔がみられない。せめて、もうすこし、秋までのちを延ばしてやりたかつた。此の赤いの、白いの、いろ／＼な花を思ひ残りなく、むしらせるためにも」。川島『新解』に、「女の子のことゆえ赤いものが好きで、すこやかに生い立っていたころは、一茶の大切にしている庭の花などむしりたがって、時には叱言を言わせることもあったかも知れない。今、墓に来て見れば、その子のよろこびそうな赤い花曼珠沙華か仙翁花のような赤い花がつんつんと咲き出している。ああ生きていたら……この句には悲しみも嘆きも言っていないが、それだけに人の胸を打つ真実がある」。荻原『新釈』に、「七七日の忌日とて、墓に詣でて、花を手向ける。達者であった頃は、よちよちと歩きながら、そこらに咲いている赤い花を見てはむしりたがった。その花を手向けにしてやることで、という意味である」。加藤『秀句』に、「こ

れはよくこんな風に解されているようだ。墓前に手向けとして赤い花を挿してやった。これは亡き吾子の生前しきりにむしりたがったが、とめてむしらせなかつたものだ。今その赤い花に秋風がそよいでいるというのである。これだと、人情に訴えることなかなか哀切なものがある。しかし、そこに畏がある。それは、『むしりたがりし』という生のままの人情へ溺没することである。やはり、これが把握に際して燃焼し、きらく時間を経てこないと救われないと思う。『むしりたがりし赤い花』を墓に献げるのに比して『むしり残りの赤い花』という表現のほうがずっと自然になる。生前の日々、遊びの種にむしりとった赤い花の、わずかに残った幾本かを墓前に献げる。これだと秋風のそよぎは切に胸を打つ」「しかし、これに溺れることは、やはりこの句の中にある生の人情の仕掛に負けたことになる」。安藤『秀句』に、「この句の『赤い花』は、同時にまた『おらが春』の中で、(中略)『やがてむしやく／＼しやぶつて捨て、露程の執念なく直に外の物に心うつりて』

とある『赤い風車』の映像と重なり合うものであるが、ここにはたしかに一茶の心理的な『赤』がつよく読みとれるのである。丸山『一茶』に、「秋風の中を赤い花が揺れている。死んだ子がよく目をつけて、むしりたがった花だ。その赤さが目に痛く、一茶の嗚咽を誘うのである」。

秋かぜの吹けとは植ぬ小松かな

㊦ 文化句帳(文化2・7)・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集

解 秋風に吹かれ、強く根を張って、冬に耐えよ、の意を込めて小松を植える、の意か。

秋風や壁のへمامシヨ入道

㊦ 七番日記(文化8・8)・我春集・文政版発句集
注 へمامシヨ入道、「へへののもへじ」風の人物戯画。僧形横向きの座形に見える。これは壁の落書きであろう。

解 古壁に落書きされたへمامシヨ入道。そのうすれ

かけた姿が秋風にふきなぶられている、の意。

▼ 川島『新釈』に、「同じ落書でもへمامシヨ入道には寂びがある。心の熱を失って行くやうな秋風の中に晒されて居る入道の姿は、荒涼たる秋の表象のやうに、見て居る人の心に乾いた淋しさを誘ふ。珍奇な取材であるために、この句を単に滑稽な句と見ることは当たらない。壁に描かれたへمامシヨ入道と、それに対する作者の心との交渉が、折柄の秋風に托されて居る。滑稽といふよりも、寧ろしみぐとしたり寂びのある句である」。荻原『春秋』に、「壁にへمامシヨ入道の落書のしてあるのに、秋風を感じたところ、そこに俳句がある。かういふ句は、非常に単純なもので、ただ、その壁のへمامシヨ入道にレンズを向けて、大うつしに出したところの味であるが、斯うしたた、この句はこれでいいのである。尤も此場合に『秋風』を感じるか、『秋晴』を感じるか、『秋雨』を感じるか、或は『行秋』を感じるか(同じ秋の季節にしても)といふことが大切なので、それは写真では写し出されない所の空気なのであって、

而も俳句では、この空気を写し出さなくてはならないのである。此句は五七五の定型になつてゐないところが注意すべきだ。伊藤『一茶集』に、「壁の落書の佻しさに秋風を配した句」。中島『一茶集』に、「壁に落書されたへмамシヨ入道の上を秋風が吹き過ぎる、というのである。秋の寂しさが、実感をともなつて迫ってくる」。川島『一茶集』に、「へへののもへじ式の落書であるが、同じ落書でもへмамシヨ入道には寂がある。秋風を配して、異様な入道が生き返ってくる」。

墨染の蝶が飛なり秋の風

㊦ ほまち畑・文政九、十句帳写(文政9)・希杖句集・文政版発句集・発句鈔追加

▽ 文政句帳(文政5・6)、中七以下「蝶の出立や秋の暮」。同(5・8)、中七「蝶もとぶ也」。同(5・9) 中七「蝶と成けり」。

注 ほまち畑、前書「八月九日両吟」として、これを立句に文虎との両吟歌仙を収める。

解 黒い蝶がひとつ、秋風に舞っている、の意。「墨染の蝶」の詮索は無用であろう。

正見寺の上人十ばかりなる後住を
残して^(遷)迂化ありし哀さに

秋風やちひさい声のあなかしこ

㊦ 文政句帳(文政5・8)・文政版発句集

▽ 文政句帳、前書なし。七番日記(文化15・8)、座五「新乞食」。

注 正見寺、長野県上水内郡豊野町浅野の浄土真宗寺院。一茶は文化五年ごろから頻繁に往来する。あなかしこ、蓮如の『御文章』の結びになぞらえるが、これは読経の声。

解 前任職が往生の素懐をとげた後を継ぐ若院はまだ十歳ばかり、そのいたいたしくもある読経の声が、秋風の中に消えていく、の意。

寝延や野分を吹かす足のうら

㊤ 句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

▽ 句稿消息・希杖本句集、上五・中七「寝むしろや野分に吹かす」。発句鈔追加、中七「野分にふかす」。

注 中七「野分を吹かす」は、「野分に吹かす」の誤りか。
解 秋風に蕙を敷いて、足を風の方角に向けて横になり、疲れた足を投げ出し、それを癒しているのである。「秋風」でも癒しきれない行脚の疲れが感じられよう。

▼ 川島『新釈』に、「田も畑も不安にざわめく戸外の景色を見通す農家などの板間に、寝蕙を敷いて寝そべつて、直接風に吹かれて居る足のうらの冷や／＼とする感じである。『野分を吹かす』と、逆手の叙法は例の一茶の好みである。兎に角、この句の生命は坐五『足のうら』にある。足のうらを焦点として荒涼たる野分の気分が全体に拡がって居る肢体の一部を捉へて印象を鮮明にする作者の慣用手法で、この外にも多くの例を残して居る」。

五十過ては

露はらり／＼大事の浮世かな

㊤ 七番日記（文化9・8）・株番・茶翁聯句集（一）茶・九臧両吟半歌仙）・文政版発句集・発句鈔追加
▽ 七番日記・株番・茶翁聯句集・発句鈔追加、前書なし。

注 全集本は前書「五十足ては」と校訂。原本、「過」は「足」にも見えるが進繞を下に書いたと見てよろう。

解 今朝降りた露が、はらりはらりと落ちて居る。それを見るにつけても、今日一日の命が大事に思われる、の意。

露置くや茶腹で越えるうつの山

㊤ 文政版発句集初出

▽ 七番日記（文化11・7）、上五「白露や」。
注 うつの山、宇津谷峠。

解 宇都谷峠に、この地方特産の茶を言いかけた言語
遊戯。

露ちるや地獄の種をけふも蒔く

㊦ 七番日記(文化11・7)・文政版発句集

▽ 希杖本句集、上五「白露や」。

注 文政版発句集、この句の前に「しら露やいつもの

処に火の見ゆる」を収める。

解 露が散り落ちて、この世の無常を告げている。そ

れは十分承知していながら、仏の教えに違う行ない

を重ねてしまう、の意。

しら露に浄土参りのけいこかな

㊦ 志多良・句稿消息・希杖本句集・文政版発句集

▽ 七番日記(文化10・8)・滝沢可候宛書簡(文化

10・8・22付)、上五「朝露に」。

解 一面に降りた朝露に、無常迅速の言葉を思い合わ

せ、念仏を唱える、の意。「浄土参りのけいこ」は、

念仏を唱えることと解してよかるう。

火ともして生おもしろや草の露

㊦ 句稿消息(文化10)・文政版発句集

▽ 志多良、中七「生おもしろき」。

解 この世の無常をさとす露だが、ともし火に光る草

の露にはそれとは別の趣が感じられる、意。

男女私にちぎりて夜ひそかに逃行を教訓して

人問ば露と答えよ合点か

㊦ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化11・8)、上五・中七「いざら

ば露よ答よ」。

注 伊勢物語(六段)に、「白玉か何ぞと人問ひしと

き露とこたへて消えなましものを」。

解 駈落ちの途中で、人に聞かれたら「つゆ」とだけ

答えて、あとは何も言うな、わかったな、の意。伊

勢物語第六段をふまえた。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「初案は初句『いざさらば』

になつてゐるが『人間はゞ』と改めたことは当然である。これは一茶の話の内でも面白い微笑を禁じ得ない一挿話である。恐らくは隣村野尻村の門人閑之の事であるらしい。この句は文化十一年八月の七番日記に、『いざさらば』で出てゐるが、同年五月四日の記事に、『今夜閑之契_ニ下女、於_ニ草庵_ニ欲_レ為_ニ同枕、有_レ障_レ殘_レ書_レ閑之婦_ニ野尻、而下女不_レ来』と漢文で書いてゐる。この時からであつたが、二人しめし合せて逃げねばならぬ破目になつたのであろう。かうして男女のランデブーの場所を与へ、さうして合点かと『教訓』する所、一茶先生も中々くだけた粹人である。安藤『秀句』に、「密会して夜逃げを決意した若い男女が、途中で運悪く顔見知りの村の誰それに出会う。こんな夜半にどこへゆくのかと怪しみ問われたら、闇に身を潜めて『露』と答えよ、余計なことを口にするでないぞ、よいか、わかつたな、というほどの意味であろう」「あるいは、この句の『露と答へよ合点か』は、一茶の心の中にあつた墮落の理想像であつたかもしれない。そこへ無神経な

姿を見せつけられては、それでは見逃してやろうにも見逃してやる気になれない、と反感を覚えたのもあろう」。

愛子を失ひて

露の世は露の世ながら去りながら

④ おらが春・文政版発句集

▽ 七番日記（文化14・5）、前書「悼」。中七「得心ながら」。

注 おらが春、第十四話「さと女を悼む」章段で、その結びに収める。本文末尾には、「この期に及んでハ、行水のふたゝび帰らず、散花の梢にもどらぬくひ_(じ)ことなどゝあきらめ臭しても、思ひ切がたきハ恩愛のきづな也けり」とある。

解 この世は露のようにはかないもの、そんなことは観念的に十分承知している、それでありながら……、の意。↓考

▼ 吉田『講座』に、「露の世とあきらめはあきらめ

てもさりながらあきらめがたい親子の情である。何といふ素直な句であらう。何といふ心の底の悲しみを訴へた句であらう。何といふ静かな、何といふ崇高い調子の句であらう。無障無碍秋の風のごとく自然な句ではないか。腸をさいて見せた句ではないか。勝峯『名句評釈』に、「描辞の方から言へば一言一句一音の拔差しを許さぬ緊密さであり、流暢な諧調である。『露の世は』に対して『露の世ながら』と受けた重言法と条件法とが誰の耳にも極めて自然に流れこむし、更に『さりながら』と逆語法を以て反撥した句法も極めて自然に享け入れられるし、その次に来るべき説明語が省略されて居て、しかも誰の思想にも順当にそれが領得されて余蘊が無い。勝峯『評釈』に、「珠と凝つたと見れば、忽ち落ちて消える露こそ、はかなく脆いこの世はあの露のひとつにすぎないのである。露の世の露は後れさきだつためしとしても、それは喩へであつて此の世の実相ではないから、露の世とだけでは諦められぬ。此の世への執着が残ることになる。『さりながら』が一

茶の人間的な述懐になるのだが、七番日記に『悼』の題で『露の世は得心ながらさりながら』の先案があつて、この句はその再考なのである。伊藤『一茶集』に、「誰か別人を悼んだ旧作なのを、さと女の死に臨んで改作転用したのである」。川島『新解』に、「露のようにはかない無常の世の中だ、はかない世の中だとは元より知っている、元より知っているけれど、そうだけれど。と、あきらめてもあきらめ切れぬ果てしなき愛執の思いを、露の世・露の世ながら・さりながらと、二重の重語と環状的表現によって、輪廻の相さながらに余情に訴えている」「心を蕩かす愛の記にしても、果てしなき暗愁の籠つたこの悼句にしても、そのうしろには、いかなる事物をも逃すまいとしている文芸作家の冷厳な眼が感ぜられて、一道に執する者の宿命を、むしろ心寒いものに思わせられる」。荻原『新解』に、「この浮世は露の乾ぬ間の果敢ないものだ、それはそうに違いない、生命あるものは皆無常だ、しかしながら、さてその露の如く果敢なく散つたものがわが子であつ

て見れば、人生は露の如しなどと悟ったふうに、あきらめてはいられない、という意である」。栗山『講座』に、「結んだと思えばたちまち消える秋の露のように、この世は無常ではかにものだと承知しているものの、この掌中の珠といつくしんできた愛児に先立たれようとは……どうにもあきらめがつかぬという句意である。『露の世は露の世ながらさりながら』と同語反復による纏いつくような律語は、重く沈殿する悲哀をそのままにじみ出させている。その点『得心ながら』を改めたのはうなずけよう」。加藤『秀句』に、「この仮の世に受けた生は仮の世にふさわしく露のようにはかないものだという無常の観念で一応は諦めてもみる。しかしながら、それが血を分けた肉身であってみると、そうした露の世というような考え方ではどうすることもできないというのである。『露の世』と現世を考え、彼岸に迎えとられた吾が子だと観する一応の構えが、人情に惹かれる気持の前に自ずと崩れてゆく。『露の世は露の世ながらさりながら』には、老いの愚痴に似た

口調が纏綿して人をひきずる。この句は燃焼を経た詩の世界、生きた時間の魅力ではない。市井人の人情に殉ずる生の魅力だ。だから惹かれたあとに未練の思いを滓のようにとどめるのである」。丸山『秀句選』に、「この世は仮の世であり、露のようにはないものだという無常の観念で、わが子の死を思い諦めてみようとするが、その理もこの骨肉の愛執を断ち切ることはできない。『露の世ながらさりながら』には、諦めようとしても諦め切らない、老いのくりごとに似た口調がなまの形で出ている」。

考 理知の上では十分に納得もでき、その浄土往生についても疑う余地はないのだが、それでいて心がおさまらないのは、恩愛の情が理性や知性よりも強く大きいからである、というのである。理性や知性では制御しきれない恩愛の情の強さ、大きさ、それを自覚するところに一茶の親鸞教徒としての信仰の基盤がある。

この句がすでに中七を「得心ながら」として七番日記に見えることから、他人の弔句の転用にすぎな

いとす説もあるが、初案はどうあれ、愛娘を失った一茶の悲しみにいつわりはなく、真情の吐露と見なければならぬ。その真情を生のまま十七音にたたき込んだとき、一茶は俳諧史上に確かな位置をしめる。この句の季語を「露の世」の「露」と見るのが普通である。だが、それは「さりながら」を表出するために用いられたにすぎない。音数律を整え、季語を有する伝統俳諧における発句の形式ではあるが、季語の趣味と句意、その統一性とのかわりかは伝統発句のそれに似て非なるものである。このことは名句に数えられる「古郷はよるもさはるも茨の花」においても同様である。

露ちるやむさい此世に用なしと

㊤ 七番日記(文化10・7)・志多良・句稿消息・文
政版発句集

▽ 句稿消息、前書「秋」。

注 むさい、意地や欲が強くて、心のきたないさま。

解 清廉にして潔白な朝露は、こんな「むさい世の中

には何の未練もないとばかりに散っていくよ、の意。
風刺的な意と同時に自戒の意を含める。

秋霧や河原撫子見ゆるまで

㊤ 文化句帳(文化1・8)・発句鈔追加

▽ 稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「川原なで
しこぼつと咲」、連句稿裏書、中七以下「河原なで
しこりんとして」。

解 秋の霧が立ちこめている、この霧も撫子の花が咲
きはじめるころまでのこと、の意か。

あり明や浅間の霧が膳を這ふ

㊤ 七番日記(文化9・7)・株番・西原文虎宛書簡
(文化9・7・22付)

▽ 株番、前書「軽井沢」。

注 あり明、有明の月

解 軽井沢に泊った翌早朝、有明の月がかかる浅間山
のあたりから湧き起った霧が、旅宿の食膳の上さま
で流れ込んでくる。の意。爽やかな朝立ちの気分

ある。

▽ 川島『新釈』に、「一茶が江戸から郷里への往復に、幾度か足跡を残したであらう浅間山麓、殊に荒涼たる浅間山のだら／＼登りの眼前に迫る追分辺の旅籠の朝と見る時に、一層一句の情景がハッキリしてくる。『有明』と云つて時間を現し、『浅間』と『膳』で場所を示し、『這ふ』といふ動詞で景色を活躍させてあるところは、寸分隙のない叙法である」

「然し、精巧な織物を見るやうに、余りに／＼行届き過ぎて居る技巧のために、幾分雄大な景趣をそがれて居る」。頼原『名作集』に、「有明の月がまだ淡く残つてゐる早暁、早出立の膳につくと、明け放たれた窓先から、低く這つた浅間の霧が膳の上まで流れ込んでくる。早暁駅の情景が遺憾なく描かれて居る。一茶の叙景句中最もすぐれたものであらう」。

暉峻『名句の鑑賞』に、「浅間山麓の高原地帯である軽井沢の旅宿に泊つた翌朝、早い朝立の膳に向つてゐると、目の前に聳える浅間の方から流れて来た霧が、いつとはなしに膳の近くまで漂うて来た。秋

の朝の高原の冷気が測々として身に迫るのを覚えます。なほ『有明』は、未明といふ時を示すのみでなく、霧の去来する薄明の空に、有明月の淡くかかる実景として鑑賞すべきでせう」。栗山『鑑賞講座』に、「句は旅宿での早立ちの場面を叙したものである。早暁の窓外には、淡い有明の月が空にかかり、裾を霧につつまれた浅間の山塊が眉に迫ってくる。窓を明け放すと、乳色の山霧が煙りのように流れこみ、低い膳のあたりを這うように通りすぎてゆく、という情景である」

「独りわびしい食膳に向かう彼の旅情をかすめるように流れ去る。きびしい一茶の心情を反映したか、句はきわめて正確なデッサンとなっている。『膳をはふ』という叙法が巧みで、一句に生動感を与えていよう。なお、『有明』は月が空に見えたまま夜が明ける意で、秋の季語ともなるが、一茶はかならずしも季語として用いてはいない」。加藤『秀句』に、「二の句の『有明』は、有明月が明けはなれた空に淡くかかっているものと鑑賞されている場合が多い。私も始めはそう思っていた。

しかし、この句は往路も迫りは七月十四日松井田、十五日田中、十六日戸倉、十七日善光寺となっているので、軽井沢では迫まっていなしいし、夜が明けてから空に残る有明月のはっきりかかるところではない。帰路軽井沢に泊まったのは(八月)十四日だから、十六日以後の空に残る有明月のあらうはずはない。そうなると、『有明月』は一般的な仮構かということになるが、そうではなくて、これは旅の宿の有明行燈であろう。『有明し』ともいって、夜明けまで点し放ししておく灯である」。丸山『一茶』に、『七番日記』によれば、八月十四日に軽井沢の林屋三右衛門方に泊っているから、この句はその翌朝の囁目吟かとも考えられるが、日記の七月の部に終りに記入してあるので、あるいは往路の印象を句にしたものかもしれない。「膳のわきには既に用意されてある振分け荷物や笠。爽やかな朝立ちの気分である。『有明』と言って時間を表わし、『浅間』で背景を『膳』で場所を示し、『はふ』という一語で情景を躍如させている所は、寸分の隙もない叙法である。特

に『はふ』の一語は、霧の動態を的確にとらえている。」前田『俳風』に、『きやらぶき集』所収とし、「有明は有明月のことで、陰暦十六日以後の夜明の空に淡く消え残る月。その有明月のかかる浅間山の夜明の外景と、朝餉の食膳に向う内景に、山裾に湧いた霧を配した雄大な構図、ア音の頭韻の反復に支えられた平明軽快な句調、山霧の動態を『膳を這ふ』としたリアルな描写、これらが交響しあって、早立ちの爽快な気分を感じさせる佳吟となっている」。宮本『大観』に、「早立ちの膳に向かうと、まだ有明の月が淡く消え残っているのが見える。あけはなした窓からは、浅間山麓の朝霧が膳のあたりを這うように流れ込んでくるといった旅情も詠まれた叙景句として一茶の佳吟である。ただし『七番日記』の記事から、この年帰郷の往路には軽井沢に泊まっておらず、帰路には八月十四日軽井沢泊まりで、有明月の空に残るはずがない(と)という事実を詮索し、これを一茶仮構と見たり、あるいは『有明』は夜通しつけっ放しにして置く『有明し』すなわち有明行

燈と見る説もあるが、いまは作者が幾度か往来した中仙道の旅での印象と見て通説に従って置きたい。

考 文化九年、一茶はこの年二度の帰郷をした。一度

めは六月十二日江戸出立つ。同月十八日柏原着。八月十二日柏原を立ち、江戸帰着は同月十八日。この旅の帰路、八月十四日には軽井沢の林屋三右衛門方に一泊した。二度めの帰郷は、十一月十七日江戸を立ち、柏原着は同月二十四日であった。

「有明」は、有明の月と見るのが普通であり、それは十六夜以降の月である。この句を嘯目吟と見れば十四夜の有明月はありえない。それで、加藤『秀句』は「有明行燈」の明りだろうと推量した。しかるに、この句は七番日記の文化九年七月の部の終りから十九句めに記してあり、七月中の作と見なければならぬ。

一句の季語は「霧」と見るべきであろう。「有明」はさわやかな朝立の気分を引き出すために用いられたもので、実景にこだわることはなからう。冷たい山霧が流れ込む仲秋の旅宿の朝、それがこの句の生

命である。

寝がへりをするぞ脇よれきりぐす

㊤ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化13・7)、「寝返りをするぞそのけ蚕」。

解 蒲団の上であろうか、寝筵の上であろうかこおろぎが入ってきた。そのこおろぎに語りかけたのである。

▼ 荻原『春秋』に、「きりぎりすが家の中まではいつて来て、飛んでゐるのだ。おい、そこに居てはあぶないぞ、そつちへどけよ、ときりぎりすに云うた言葉。畳の上にゴロリと昼寝でもしていた時の即興であろうか」。

白露の玉ふんがくなきりぐす

㊤ 八番日記(文政2・6)

▽ 七番日記(文化13・7)、中七「玉ふみかき^くな」。

解 朝の光を受けた露の玉。こおろぎよこの美しい露

の玉を踏み破るなよ、の意。

弥陀堂の土になる気がきりくす

経堂

しいことよ、の意。

虫の尻を指して笑ひ仏かな

㊤ 文政版発句集初出

▽ 文政句帳(文政7・閏8)、中七「土になれく」。

注 弥陀堂、真宗寺院の本堂。きりくす、エンマコ

オロギであろう。

解 寺の本堂の縁の下に集ったコオロギよ、お前たち

は本堂の縁の下の土になるつもりか、の意。

藪むらや灯籠の中にきりくす

㊤ 八番日記(文政2・7)・おらが春・文政版発句集

注 経堂、寺院で経・律・蔵の三經典を集大成した一

切経を収蔵する書庫。笑ひ仏、経堂には梁の傳大士が普建・普成の二子を伴った像を安置する。このうち普建の像は左手の指先を大士の方に向け、普成の像は笑みを浮めている。そのために、後者の俗に笑

㊤ 山月宛書簡(文政9・7・中元日付)

注 藪むら、藪勝ちの村。僻村。片田舎。

解 こんな片田舎のこと、灯籠の中にまでコオロギが

入り込んでいるよ、の意。

きりくす声が若いぞくよ

㊤ 文政版発句集初出

解 軽やかに鳴くコオロギの声、お前の声の何と若々

の東陽郡烏傷県に生まれた、有髪の道士である」
「十六歳の時劉氏を娶って普建、普成の二子を生んだが、二十四歳の時稽停塘というところで梵僧の高頭陀に会ってから求道の志をおこし」、後に「鐘山

下の定林寺に住し、県官の資給を受け、ついで翌大同元年には般若三慧経を重雲殿に講じ、翌日またひとり召されて、武帝の敬重を受けた。また傳は輪藏を創始し、これを持するものには大利を得せしめたので、のち輪藏を作るものは傳父子三人の像を安置する慣例となった。「大建元年四月二十四日在寿七十二歳をもって、入寂された。世に伝える像は、ある時大士の影が水に映ったのをみるに、円光宝蓋の姿であったため普建はこれを指さし、普成もまた見て笑った像」とある。

解 経堂の笑い仏は、屁ひり虫を指さして笑っているよ、の意。形式上の季語は「虫の屁」(屁ひり虫)だが、これも「笑ひ仏」の表情を引き出し、強調するために用いられたにすぎない。実は「指しているのは普建像、笑っているのは普成像である。」

▼ 川島『種々相』に、「大士の左右には普成普建二童子がたつて居る。普成が父の顔の水に写るを見て笑つたといふ故事から、笑ひ仏などの俗称があるのであらう。そして、この句の「指して」も、この故事

にからんで居る。一茶独特の飄逸であるが、そればかりでなく、軒近く、いとゞ馬追屁ッぴり虫などの、飛び交ひ啼き連れる草深い経堂の様を彷彿させる。「勝峯『名句評釈』に、「経堂を廻って秋草は離々として茂つてゐる。そこには夜となく昼となく、虫が遊び虫が鳴いてゐた。たまには放屁虫が放屁することもある。それを笑ひ仏が、成程臭い屁だなアと笑ひ給ふことであらう。即ち経堂の三尊、笑の三尊と放屁虫といふ事を思ひあはせての、滑稽といはんよりは、むしろ学究的の作句であつて、実感よりは一茶の技巧と知恵の閃きがより多く動いてゐる一句である。一茶の句の中には斯うした故事や古典から援用したものゝ多いことを注意されねばならぬ」。勝峯『評釈』に、「何が可笑しく三人ながら笑つてゐるのか、普建の指をあげる方向を見ると、一疋の屁ひりむしが嗅いやつを落したところである。誰がやつたんだと怪しみ、その屁の正体が知れたので、手を拍つて嘩さんばかりにあゝして笑つてゐるのである。笑ひ仏を詠むため、警技にも屁ひりむしを案

じて、そこに滑稽を求めたので、必ずしも経堂に屁ひりむしが存在したと見ずともよい。一茶の空想を弄した作と解される。伊藤『一茶集』に、「三尊の中、普建は笑ひながら指さす恰好をして居るので、笑ひ仏の称がある。笑ひ仏が笑つて居るのは屁ひり虫がゐるせみだろうか」。中島『一茶集』に、「普建は笑いながら指さしているので、一茶は屁ひり虫を笑つて指さしているのだろうと茶化したのである」。加藤『秀句』に、「普建はいかにも笑いながら指さしているように見えるので、ここを発想の契機にしたもの」『指さして』が全く隔絶した両者をつないで生動させているところ、実に妙である」。

考 一茶が「笑ひ仏」という呼称に興味を持っていたことは、「と、喰た花と指す仏哉」(株番)、「蚤とぶや笑仏の御口へ」(七番日記、文化9)、「稲妻にけら／＼笑ひ仏哉」(七番日記、文化11)、「あれ花が／＼と笑ひ仏哉」(八番日記、文政3)などでわかる。ここにあげた「笑ひ仏」は、必ずしも経堂のそれをさすものではない。右の句「経堂」と前書して

あるが、これも「笑ひ仏」を引き出すためで、その所在の詮索は無用であろう。

放屁虫命々が根垣としられけり

㊸ 七番日記(文化11・7)、稿本発句題叢・希杖本句集

注 七番日記・稿本発句題叢・希杖本句集、上五「屁ひり虫」。

解 時折り放屁をくり返しながら垣根を結う老人。

寒いぞよ軒の蝸唐がらし

㊹ 句稿消息・文政版発句集

解 高地柏原の秋は早い。肌寒い秋風の中、カナカナ蟬と、軒につるされた唐がらしに向って語りかける。

或美の評は「妙」。

▼ 川島『新釈』に、「昼間の程は未だ暑くとも、山辺の気温は暮方になると急に冷えて、頭の心まで透るやうな澄切つた空気の中に、軒近くカナ／＼が鳴いて居る。カナ／＼蟬の声は実際虫の音なぞより直

接人に迫るものがある。そして、眼に入るものは紅一点の唐がらしであった。唐がらしの固々と艶を持つた紅は、この場合特に強く作者の注意を捉へて、蝸の音の中に漫然と振りつゝある哀感をグイと引締めて、『寒いぞよ』といふ極めて直接的な感覚的な叙法を取らせた誘引となつたとも思はれる。このやうに様々の感覚を盛つて、それ〴〵の印象を明かにして居る作は珍らしい。それも自然な描写であるために、少しも無理なく統一されて居る」。

其分にならぬ〜と蝸螂哉

㊤ 八番日記(文政4・9)・だん袋・文政版発句集

▽ 七番日記(文化15・8)、「蝸螂はむか腹立が仕事

哉」。八番日記(文政2・9)、「蝸螂よ五分の魄(持)白

たとて」。「蝸螂や五分の魄見よく」と。おらが春・

発句鈔追加、「蝸螂や五分の魄これ見よと」。

注 俗諺に、「一寸の虫にも五分の魄」。

解 カマキリは「五分の魄」、そんな小さなものではないぞと斧をふりかざして満身に闘志を見せている、

の意。

古犬や蚯蚓みみずの唄にかんじ顔

㊤ 文政版発句集初出

注 蚯蚓の唄、大辞典に「古来蚯蚓の鳴くとて和歌などに詠せらるるも誤にて、螻けらの鳴くを誤れるなり」。雑俳集・たから船(元禄16)に「歌うたふ蚯蚓に口の有り所」。文政句帳(文政8・9)、「里の子や蚯蚓の唄に笛を吹」。

解 老犬が一頭、神妙な顔で地面に耳をつけるようにしてミミズの唄を聴いている、の意。

御祭りに赤い出立のとんぼかな

㊤ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化14・8)、上五「御祭の」。八番日

記(文政4・7)、「御祭に蜻蛉も赤い出立かな」。

解 収穫を祝う秋祭り。とんぼまでが赤いよそおいで空に舞っているよ、の意。

二百十日

世の中はよすぎにけらし草の露

㊸ 志多良・希杖本句集・文政版発句集

▽ 志多良、前書「二百十日晴天」。七番日記、座五「鳴藪蚊」。句稿消息、座五「けさの露」。

解 二百十日。晴天に恵まれて、世の中は安穩に過ぎているようだ。草葉の露さえ落着いているよ、の意。

狩好きの其身にかゝる夜露哉

㊸ 稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

解 暮方まで獲物を追っていた男。獲物の怨みを負うように、夜露に濡れていることだ、の意。

御目出度存候今朝の露

㊸ 八番日記(文政3・9)・文政版発句集

解 候文「目出度存候」を使い、静かに明けた秋の朝を「俳諧」をもって詠んだ。